

競争と学びあうことと

西田通弘*

To Compete and To Learn Each Other

Michihiro NISHIDA*

われわれ人間個人が健康を害して病気にかかることがあるように、人間の集合体である社会という有機体も病気に冒されることがある。産業文明の先進国として発展してきた国々が、現在は、英国病、イタリア病、フランス病、あるいは福祉国家では、スウェーデン病と呼ばれるような重症病状にあるといわれている。

これらの症状に至った原因はいろいろあろうが、そのひとつとして指摘したいのは、デマルケーション (Demarcation 境界作り) が行き過ぎたことである。働く者が、仕事の契約をタテにして、「私の仕事はここまでだ。これから先は別の人の仕事だ」といって手を出さない。あるいはタイプをたたいている途中でも、終業時間を知らせるベルが鳴れば、すぐにやめてサッサと帰ってしまう。このように決められたこと以外には、手を出さないという境界線を自分勝手に設けて、そこから飛び出さなくなったことである。

価値観が多様化してきた今日、ただ単純に競う合うことだけがすべてではない、という風潮が生まれているのは事実である。しかし、ある程度、活力をもった社会を維持していくためには、これは好ましいことではない。自らの社会的地位の向上を中心とした自己実現を求めて、しのぎを削る競争原理が存在してこそ、人間社会の進化があるのではなからうか。

野球やサッカーのような集団スポーツの優れた選手は、あらかじめ与えられた自分の定位置における役割を果たすだけでなく、積極的にそれを乗り越えて、他人のポジションまで手をのばす。これをスポーツ用語では、リーチングアウト (Reaching Out) というそうである。むろん、そこには相手との補完・調和があつての話だが、リーチングアウトすることによって、素人にはとても真似のできないファインプレーも可能となる。それができる人こそプロ選手として尊敬されるのである。

日本経済の成長要因のひとつは、T・Q・C (トータル・クオリティ・コントロール) の徹底といわれるが、T・Q・Cは欧米からの輸入システムであり、その基本となっているものは、リーチングアウトの姿勢である。日本で生まれたスポーツは、相撲とか剣道、柔道のように、2人だけで競うもので、前記のような集団スポーツはほとんどすべて欧米から輸入したものである。従って、リーチングアウトの考え方は、欧米で生まれたものと思うのだが、欧米の企業経営にはあまり使われていないようである。これに反して、日本では、この輸入したスポーツ精神から学びとったものを育て、忠実に企業経営に生かしてきたことが、今日の違いを生み出してきたともいえる。

スポーツマンと同じようにリーチングアウトのできる経営者、管理者こそプロの経営者、管理者である。これは企業経営だけに限られたことではなく、行政面においても、学問分野においても同じではないだろうか。ひとつの目標に向かって、異分野の専門家や研究者が集まって、同質同分野では真摯に競争し、異分野では謙虚に学びあう。そこに、知的な融合があつてはじめて、新しいものが育まれ、実りある研究成果が生まれてくるものと考え。当学会があえて挑戦してきた学際的研究の意義も、そこにあるといえる。

日本も油断していると、あっという間に日本病という重症に陥る可能性は十分存在する。政治も行政も企業も、学問分野にあつても、活力ある日本を作り上げるために一層努力を払いたいものだ。

* 国際交通安全学会副会長、本田技研工業相談役
IATSS Vice President, Advisor, Honda Motor Co., Ltd.
原稿受理 昭和57年5月26日